

曖昧性耐性と文脈情報の利用が アイロニー理解に及ぼす影響¹⁾

西村 佐彩子

The Effect of Ambiguity Tolerance and Contextual Information Utilization
on Irony Understanding

Sayako NISHIMURA

Accepted November 25, 2011

抄録：本研究の目的は、関連性理論の観点から、曖昧性耐性と文脈情報（聞き手の明示的先行発話と聞き手の統制可能性）の利用がアイロニー理解の個人差に及ぼす影響を検討することである。短期大学生 71 名を対象に質問紙調査を行った。その結果、曖昧な状況で不安になる人は、聞き手の統制可能な状況においてアイロニー発話に否定的態度を感じやすかった。また、曖昧さを拒否する人は、文脈情報に関わらずアイロニーを理解しにくかった。曖昧性耐性によってアイロニー理解の特徴が異なることが示唆された。

索引語：アイロニー、曖昧性耐性、関連性理論

Abstract : This study examined the effect of ambiguity tolerance and contextual information utilization (the explicit preceding utterance of the hearer and controllability of the hearer) on individual differences in irony understanding from the viewpoint of Relevance Theory. Seventy-one college students were asked to respond to a questionnaire. The results showed that participants who become anxious in ambiguous circumstances were likely to feel a negative attitude in ironical utterances in situations where the hearer is controllable. Further, participants who reject ambiguity failed to understand irony regardless of contextual information. This study suggested that features of irony understanding vary according to ambiguity tolerance.

Key Words : irony, ambiguity tolerance, Relevance Theory

1. 問題と目的

言葉は有効な表現、伝達手段の一つである一方で、同じ表現でもその理解には個人差が存在する。そのため、言葉によるコミュニケーション場面においては話し手と聞き手の間にずれの問題が生じる。非字義的言語の代表であるアイロニーは、一見事実と反する表現を行うことによって真意をほのめかす表現である。その真意は、発話の意味内容から、非難や冗談といった話し手の態度まで多岐にわたっている。アイロニーは話し手の意図と、聞き手による理解や態度の受けとり方の間にずれが生じやすい発話であるといえる。本論文の目的は、同じ文脈情報をもつアイロニーの理解に生じる個人差を、

聞き手の文脈情報の利用と曖昧性耐性の低さという個人特性から明らかにすることである。

Sperber & Wilson (1986) の提唱した関連性理論 (Relevance theory) では、“言語伝達において人はより少ない処理労力でより大きな文脈効果、すなわち最適な関連性を達成しようとする”という関連性の原則に従った推論が行われると説明している。彼らによると、アイロニーは“先行する期待や規範にエコー的言及 (echoic mention) ²⁾ を行うことにより、話し手の態度を伝達する (Sperber, 1984)”表現である。

たとえば、台風が吹き荒れている状況 (否定的場面) での「いい天気だね」という発話 (肯定表現) はアイロニーになる。アイロニーの話し手は、“望ましい天気”という肯定的期待に関する意見を“文脈情報として利用”しながら繰り返し、否定的現状とのずれを指摘することで態度を伝達しており、聞き手は“話し手が利用した文脈情報を利用”することで話し手の意図を理解するといえる (西村, 2005)。すなわち“エコーされた意見から自分を切り離すことによって、話し手はその意見をもっていないことを示す (Blakemore, 1992)”のである。晴天が望ましいといった“肯定的規範”は常に存在しているため文脈情報として利用できる。それ以外にも、肯定的期待を予測する先行発話 (たとえば、聞き手の「きっといい天気になる」という予測) がある場合など、利用できる文脈情報は単一とは限らず複数存在することも多い。

存在している期待の多くが肯定的内容であるため、アイロニーは先述の例のように、否定的場面において肯定表現 (一般的に望ましい内容を表す表現) 形式をとることが多い (Jorgensen, Miller & Sperber, 1984)。そこで本論文でも否定的場面で発話される肯定表現アイロニーを対象に検討を行う。

アイロニーが文脈情報の利用によって理解されることは実証的に支持されている (e.g. Jorgensen et al., 1984; Kreuz & Glucksberg, 1986; 西谷, 1996; 西村, 2005)。これらの先行研究では、提示された文脈情報が同じであれば同じように理解されることを暗黙の前提としてきた。しかし日常における会話では、全く同じ状況と発話であっても、人によって受けとり方が異なる方が自然である。特にアイロニーのようなさまざまな態度が含意される発話は、理解にずれが生じやすいといえるだろう。春木 (2003) は、同じ文脈と発話表現をもつアイロニーでも聞き手が想定した解釈は多岐に渡ることを示した。同じアイロニー発話を聞いても、敏感に否定的態度を感じとる人もいれば、何を意味しているかうまく理解できない人もいるのだ。このような受けとり方の違いはどこから生じるのだろうか。

関連性理論 (Sperber & Wilson, 1986) では、背景にあるどの文脈情報を最適なものとして選択するかは聞き手によって異なると説明している。つまり、聞き手は話し手の発話が文脈情報を利用していることに気づくことで、話し手の態度を認識してアイロニー発話を理解するが (Sperber & Wilson, 1981)、同じ文脈情報が存在しても、聞き手の気づきが偏ったり、あるいは気づかないということは起こり得ると考えられる。その結果、聞き手と話し手の間に理解のずれや失敗がおこることが予測できる。つまり、文脈情報の有無ではなく、聞き手が文脈情報をどのように利用するかが理解の個人差につながると考えられる。

では、アイロニー理解において、聞き手の文脈情報の利用の仕方に影響する要因にはどのようなものがあるだろうか。アイロニーの特徴から考えてみたい。先述のように、話し手が利用していると聞き手が解釈し得るアイロニーの文脈情報は単一ではなく、話し手がどの文脈情報を利用して発話したのかが明確ではないという曖昧さが存在する。そのため、聞き手が理解のために利用できる文脈情報の幅は広がる。また、アイロニーは一見文字通りの内容を意味しない曖昧な表現であり、その意味の理解に加えて、非難などの否定的含意と冗談やユーモアなどの楽観的含意が存在するため (西谷,

1993), 聞き手が発話から受けとる情報内容は複雑である。

このように、アイロニーの表現形態をはじめ、利用される文脈情報や含意内容の曖昧さに聞き手が耐えられるかどうかという要因が、アイロニー理解に影響を及ぼすことが考えられる。そこで本論文では、曖昧性耐性 (ambiguity tolerance)³⁾ という要因をとりあげる。曖昧性耐性は、刺激の特徴を ambiguity という側面から捉え、それに対する反応の相違を認知の個人差とみなす概念である (今川, 1981)。増田 (1998) は、曖昧性耐性は認知スタイルの側面の中の環境から情報を抽出する段階での特性であり (種田, 1988), ストレスの一次的評価と関連すると述べている。聞き手の曖昧性耐性は、アイロニー理解の過程において、利用する文脈情報の評価や選択に影響を及ぼすことが推測される。先行研究では、“曖昧な状況を驚異の源として知覚する傾向 (Budner, 1962)” である曖昧性耐性の低さに焦点が当てられていることが多い (e.g. 増田, 1998; 友野・橋本, 2005)。曖昧性耐性が低いとアイロニーの表現形態や文脈情報のもつ曖昧さへの対処が難しくなり、アイロニーの理解過程において偏りや困難を示しやすいことが予測できる。

西村・北山 (2001) は曖昧性耐性を測定する質問紙である Ambiguity Tolerance Scale IV (今川, 1981) の項目に因子分析を行い、“曖昧な状況での不安” と “曖昧さの拒否” の 2 側面があることを指摘した。この 2 側面では曖昧さへの耐えられなさのあり様が異なるため、文脈情報の利用の仕方も異なる特徴を示すことが考えられる。

アイロニー理解において利用される文脈情報にはいくつかの種類があると考えられるが、曖昧性耐性の低さによって利用のされ方が左右されやすいのはどのような文脈情報だろうか。

西村 (2005) は、アイロニー理解に利用できる文脈情報の要因として、“聞き手の明示的先行発話” と “聞き手の統制可能性” の 2 つをとりあげている。明示的先行発話は、聞き手が肯定的結果を予測する発話をしたという (そしてその予測が失敗する) 文脈情報である。統制可能性は否定的現状が聞き手の能力によって変更可能であるという (可能であるのに統制しなかったという) 文脈情報である。先述の天気の場合は聞き手に統制不可能な状況であるが、「きっといい天気になる」という聞き手の明示的先行発話がある場合はその発話を文脈情報として利用することができる。また、聞き手の散らかった部屋に対する「きれいな部屋だね」というアイロニーの場合は、聞き手によって統制可能な状況であるため、聞き手が統制することへの期待が文脈情報として利用できると考えられる。

この 2 要因が “肯定的規範” と異なるのは、“聞き手の責任” に関与する文脈情報であるということである。明示的先行発話は聞き手が現状の予測に失敗したという、統制可能性は聞き手が現状を変える努力を怠ったという、それぞれ “責任” が生じるため、聞き手がアイロニーの犠牲者 (victim) となる。西村 (2005) の研究では、アイロニーの否定的態度評定において明示的先行発話と統制可能性の交互作用がみられ、これらの聞き手の責任に関与する文脈情報のいずれか、あるいは両方が存在することが、否定的態度の知覚に必要であった。これは、犠牲者が存在することでアイロニーに含意される否定的態度が強くなることを示している。聞き手の責任に関与する文脈情報が存在しない場合は、肯定的規範を文脈情報として利用することでアイロニーとなる。そのため聞き手に責任は生じず、アイロニー発話は失望の表現にとどまるため、否定的態度は弱くなるといえる。

そこで本研究では、曖昧性耐性と文脈情報の利用がアイロニー理解に及ぼす影響について、以下の仮説を想定する。

“曖昧な状況での不安” は、曖昧さに不安などのネガティブな情緒的反応を表すことで、曖昧さへの耐性の低さを示す。“曖昧な状況での不安” において耐性が低い人は、メタファー理解に用いる文

脈状況の生成を行いやすいことが示されており（西村・北山, 2001）、アイロニー理解においても存在する文脈情報に敏感に反応しやすい可能性が考えられる。さらに、アイロニーに含意される主要な態度は嫌味や軽蔑などの否定的態度であるが、これは彼らのもつネガティブな情緒と関連しやすいだろう。“曖昧な状況での不安”低耐性者は、複数の文脈情報の中に自分の責任に関する文脈情報があった場合、それにネガティブな評価を行うことで、含意される否定的態度をより強く感じやすいという交互作用が生じることが予測できる。

一方で“曖昧さの拒否”は、曖昧さを意味のないものとして拒否する傾向である。“曖昧さの拒否”において耐性が低い人は、心身両義的言語を文字通りに理解しやすい傾向がみられた（西村・北山, 2001）。“曖昧さの拒否”低耐性者は、アイロニー理解においても曖昧な文脈情報の処理への動機づけが低くなると考えられる。そのため利用されている文脈情報自体に気づかず、発話を文字通りに捉えた結果、いずれの文脈情報条件下でもアイロニーを意味が通らないものとして受けとり、理解しにくいことが予測できる。

文脈情報の有無がアイロニー理解を決定するのであれば、曖昧性耐性という個人要因によって理解に差は生じないと考えられる。しかし、アイロニーが聞き手の文脈情報の利用によって理解されるのであれば、聞き手の曖昧性耐性によって文脈情報の利用の仕方は異なり、その結果同じ文脈情報条件下であっても理解に差が生じることが予測できる。またその特徴は曖昧性耐性の低さの各側面によっても異なるだろう。

そこでアイロニー理解に利用できる文脈情報要因として、“聞き手の明示的先行発話”と“聞き手の統制可能性”の有無という2要因を設定する。さらに、これらの文脈情報の利用の仕方に影響すると思われる個人要因として、曖昧性耐性をとりあげる。そして、曖昧性耐性の特徴によって、どのような文脈情報がどのような理解の側面に影響するのかを検討する。

2. 方法

調査対象者

短期大学生女子 71 名（平均年齢 19.8 歳, $SD = 0.67$ ）。

要因計画

“曖昧な状況での不安”と“曖昧さの拒否”ごとに、3（曖昧性耐性；低耐性群、中耐性群、高耐性群）× 2（聞き手の明示的先行発話；あり、なし）× 2（聞き手の統制可能性；可能、不可能）の3要因混合計画を設定した。明示的先行発話と聞き手の統制可能性は被験者内要因であった。

質問紙の構成

(1) アイロニー発話を含むストーリー 西村（2005）のアイロニー発話を含むストーリーより、統制可能状況から“部屋”と“試験”，統制不可能状況から“天気”と“道路”のストーリーを選択して、以下の修正を加えた。曖昧性耐性という対象者の個人特性からアイロニー理解の特徴を捉えることから、アイロニー発話が対象者自身に直接向けられる状況を高めるため、登場人物はアイロニーの聞き手である“あなた”とアイロニーの話し手である“Aさん”とした。話し手と聞き手の親密性がアイロニー理解に及ぼす影響については一貫した見解が得られていないが（木村, 2001）、アイロニーは親密な関係で使用されやすいことが指摘されているため（Jorgensen, 1996；西谷, 1993）、話し手と

聞き手の関係を親しい友人とした。また、聞き手の「それって皮肉？」という発話は、話し手の発話のもつアイロニーの特徴を活性化させると考えられたため削除した。

それぞれのストーリーは以下の構成によって成立していた。

- ① 2人の登場人物（“あなた”と“Aさん”）と先行する状況の紹介。
- ② “あなた”の肯定的状況を予測する明示的先行発話（明示的先行発話なし条件は②を削除した）。
- ③ “あなた”の予測に反した否定的状況。
- ④ “Aさん”の文脈情報を利用したアイロニー発話。

ストーリーごとに、①有意味度評定：この状況で「アイロニー発話」は意味が通っているか（1 意味が通らない～7 意味が通るの7件法）、②態度評定：「アイロニー発話」はどういう意図をもって発話されたと思うか（嫌味である、冗談である、軽蔑している、1 全くそう思わない～7 全くそう思うの7件法）について評定が行われた。

(2) 曖昧性耐性の測定 今川（1981）の作成した Ambiguity Tolerance Scale IVの項目に因子分析を行い抽出された2因子を用いた（西村・北山, 2001）。“曖昧な状況での不安”14項目と“曖昧さの拒否”7項目の計21項目から成る（1 まったくそう～7 まったくちがうの7件法）。

手続き

質問紙への回答は集団で行われた。対象者には各条件1話ずつ計4種類のストーリーとアイロニー発話への評定項目、および曖昧性耐性質問紙から成る冊子が配られた。各条件に1種類ずつのストーリーがあてはまるようにし、さらに各条件の提示順序については冊子ごとに4種類のカウンターバランスを行った。対象者は最初のページで4種類のストーリーを読み、下線がひかれたアイロニー発話について有意味度評定を行った後、次ページで態度評定を行った。最後に曖昧性耐性の質問紙を評定した。

3. 結果

曖昧性耐性質問紙は“曖昧な状況での不安”（以下，“不安”と示す），“曖昧さの拒否”（以下，“拒否”と示す）の因子ごとに，“まったくそう”を1点，“まったくちがう”を7点とした合計を各因子得点とした。“不安”の平均値は44.06点（ $SD = 10.28$ ），“拒否”の平均値は25.72点（ $SD = 5.35$ ）であった。得点が低いほど各側面のもつ曖昧性耐性が低いことを示す。曖昧性耐性の側面ごとに、人数のパーセンタイル値を参考にして対象者を3群にわけた。“不安”は得点が低い順に低耐性群（38点以下、23名）、中耐性群（39点～50点、28名）、高耐性群（51点以上、20名）とした。“拒否”も同様に、得点が低い順に低耐性群（23点以下、24名）、中耐性群（24点～28点、21名）、高耐性群（29点以上、26名）とした。

有意味度評定は“意味が通らない”を1点，“意味が通る”を7点とし、態度評定では“全くそう思わない”を1点，“全くそう思う”を7点として分析を行った。

“不安”と“拒否”それぞれにおいて、アイロニー発話への評定値を従属変数とした、3（曖昧性耐性；低耐性群、中耐性群、高耐性群）×2（聞き手の明示的先行発話；あり、なし）×2（聞き手の統制可能性；可能、不可能）の3要因分散分析を行った。その結果、2次の交互作用はいずれもみられなかった。以下に、曖昧性耐性の側面ごとに分析結果を示す。

“曖昧な状況での不安”と各文脈情報を要因とした分析結果は以下の通りである。“不安”の3群と各文脈情報要因におけるアイロニー発話評定項目の平均値をTable 1に示す。

Table 1 “曖昧な状況での不安”と各文脈情報条件におけるアイロニー発話の評定平均値と標準偏差

		明示的先行発話あり		明示的先行発話なし	
		統制可能	統制不可能	統制可能	統制不可能
有意味度	低耐性群	2.83 (2.21)	2.74 (2.45)	2.61 (2.31)	1.96 (1.92)
	中耐性群	2.36 (1.73)	2.11 (1.52)	2.14 (1.69)	1.89 (1.50)
	高耐性群	2.85 (2.16)	2.95 (2.52)	3.20 (2.46)	2.20 (2.07)
嫌味性	低耐性群	5.35 (1.75)	4.96 (2.18)	5.74 (1.60)	3.96 (2.16)
	中耐性群	5.57 (1.43)	5.00 (1.74)	5.29 (2.03)	4.14 (1.82)
	高耐性群	5.50 (1.64)	4.95 (1.76)	5.40 (2.06)	4.30 (1.95)
冗談性	低耐性群	4.74 (2.00)	4.91 (2.11)	4.39 (1.97)	5.30 (1.87)
	中耐性群	3.89 (1.89)	4.25 (1.71)	3.93 (1.96)	4.61 (1.95)
	高耐性群	4.35 (2.06)	4.45 (1.96)	4.50 (2.14)	4.95 (2.01)
軽蔑性	低耐性群	3.96 (2.06)	3.00 (1.83)	4.00 (2.07)	2.04 (1.52)
	中耐性群	3.96 (1.69)	3.07 (2.00)	4.14 (1.56)	2.57 (1.37)
	高耐性群	3.30 (1.87)	2.80 (1.82)	2.90 (1.59)	2.95 (1.79)

有意味度評定では、明示的先行発話と統制可能性の両文脈情報要因の主効果が有意であり ($F(1,68) = 5.37, p < .05$; $F(1,68) = 10.99, p < .01$)、明示的先行発話がある、統制可能な状況でアイロニー発話の有意味度が高かった。すなわち聞き手の予測発話や統制可能な状況といった利用できる文脈情報の存在が、アイロニーとしての判断を促進するといえる。

嫌味性評定では、明示的先行発話と統制可能性の両文脈情報要因の主効果が有意であり ($F(1,68) = 4.04, p < .05$; $F(1,68) = 24.11, p < .001$)、明示的先行発話がある、統制可能な状況で嫌味性が高かった。また、明示的先行発話と統制可能性の交互作用が有意であった ($F(1,68) = 4.47, p < .05$)。下位検定の結果、統制可能条件においては先行発話の単純主効果はみられなかったが、統制不可能条件において先行発話の単純主効果がみられた ($p < .01$)。すなわち現状が聞き手に統制可能な場合は先行発話の有無によって嫌味性に有意な差は見られないが、統制不可能である場合は先行発話があることで嫌味だと知覚されることを示している。また明示的先行発話なし条件では統制可能性の単純主効果がみられたが ($p < .001$)、明示的先行発話あり条件では単純主効果は有意傾向であった ($p < .10$)。すなわち、先行発話がある場合でも現状が聞き手に統制可能であることで嫌味性が高くなるが、先行発話がない場合においてはその特徴がより顕著に表れるといえる。

冗談性評定では、統制可能性の主効果のみ有意であり ($F(1,68) = 6.21, p < .05$)、統制不可能条件で冗談性が高かった。

軽蔑性評定では、統制可能性の主効果が有意であり ($F(1,68) = 24.83, p < .001$)、統制可能条件で軽蔑性が高かった。また、“不安”と統制可能性の交互作用が有意であった ($F(2,68) = 3.46, p < .05$)。下位検定の結果、“不安”高耐性群では統制可能性の単純主効果は見られなかったが、低耐性群と中耐性群において統制可能性の単純主効果が見られた ($p < .001$)。すなわち、“不安”の低耐性群と中耐性群は、聞き手に統制可能な文脈情報において話し手が軽蔑しているという態度を感じやすいこと

を示している。また統制可能条件で中耐性群と高耐性群に有意傾向差が見られ ($p < .10$)、聞き手に現状が統制可能な場合でも高耐性群は軽蔑的な態度を感じにくかった。

“曖昧さの拒否”と各文脈情報を要因とした分析結果は以下の通りである。“拒否”の3群と各文脈情報要因におけるアイロニー発話評定項目の平均値を Table 2 に示す。なお、明示的先行発話と統制可能性の検定結果については、“不安”と同様の傾向を示していた。

Table 2 “曖昧さの拒否”と各文脈情報条件におけるアイロニー発話の評定平均値と標準偏差

		明示的先行発話あり		明示的先行発話なし	
		統制可能	統制不可能	統制可能	統制不可能
有意味度	低耐性群	2.17 (1.76)	1.75 (1.67)	2.08 (1.91)	1.29 (0.75)
	中耐性群	2.86 (2.20)	2.86 (2.41)	2.71 (2.33)	2.43 (2.20)
	高耐性群	2.92 (2.04)	3.04 (2.20)	2.96 (2.20)	2.31 (1.95)
嫌味性	低耐性群	5.17 (1.74)	4.29 (1.99)	5.50 (1.72)	3.58 (2.02)
	中耐性群	5.76 (1.18)	5.71 (1.59)	5.81 (1.57)	4.38 (1.69)
	高耐性群	5.54 (1.70)	5.00 (1.81)	5.15 (2.27)	4.42 (2.04)
冗談性	低耐性群	4.54 (1.91)	4.92 (1.89)	3.92 (2.15)	5.08 (1.77)
	中耐性群	4.29 (1.98)	4.48 (1.81)	4.38 (1.77)	5.00 (1.90)
	高耐性群	4.08 (2.10)	4.19 (2.02)	4.42 (2.08)	4.73 (2.16)
軽蔑性	低耐性群	3.92 (1.61)	3.29 (1.92)	4.00 (2.00)	2.50 (1.56)
	中耐性群	4.00 (1.97)	2.90 (1.64)	4.00 (1.84)	2.67 (1.49)
	高耐性群	3.46 (2.00)	2.73 (2.03)	3.31 (1.54)	2.38 (1.68)

有意味度評定では、“拒否”の主効果に有意傾向がみられた ($F(2,68) = 2.48, p < .10$)。下位検定 (LSD) を行った結果、“拒否”低耐性群と高耐性群に有意差が ($p < .05$)、低耐性群と中耐性群に有意傾向差がみられ ($p < .10$)、“拒否”の低耐性群は発話の有意味度を低く評定していた。

嫌味性評定においても、“拒否”の主効果に有意傾向がみられた ($F(2,68) = 2.67, p < .10$)。下位検定の結果、“拒否”低耐性群と中耐性群に有意差がみられ ($p < .05$)、低耐性群は中耐性群に比べて嫌味性を低く評定していた。

4. 考察

本論文では、“聞き手の明示的先行発話”と“聞き手の統制可能性”という聞き手の責任に関与する2種類の文脈情報をとりあげ、それらの文脈情報を聞き手がどのように利用したかがアイロニー理解の個人差に影響するということを、曖昧性耐性という個人要因を通して検討した。

文脈情報がアイロニー理解に及ぼす影響については、有意味度と嫌味性では、文脈情報の存在がアイロニー理解を促進するという先行研究からの予測を概ね支持したが、聞き手の責任に関与する文脈情報でも、統制可能性が嫌味性に及ぼす影響の方が明示的先行発話の影響に比べてより強かった。また、冗談性と軽蔑性では、軽蔑性は統制可能条件で高くなるのに対して、冗談性は統制不可能条件で高くなった。聞き手がアイロニー発話に含意される楽観的な側面を楽しむことや、逆に強い否定的

態度を感じることは、否定的現状が聞き手に統制可能であったかどうかという文脈情報が利用されることを示唆している。以上の結果は、アイロニーの理解に聞き手の責任に関与する文脈情報が利用されることを示しているが、聞き手の統制可能性の影響がより大きく表れ、嫌味性や軽蔑性という否定的態度については促進する方向に、冗談性という楽観的態度については抑制する方向に働いていた。

西村（2005）では明示的先行発話と統制可能性の両文脈情報がアイロニー理解においてほぼ同程度利用されていたのに対し、本研究では統制可能性の方がより理解に利用されやすい文脈情報であるという結果を示した。さらに冗談性評定では、第3者に向かうアイロニーを調査対象者が評定する場合は明示的先行発話が抑制していたが（西村，2005），調査対象者が聞き手になる場合は統制可能性が抑制していた。この差異は、他者間のアイロニー会話を対象者が評定した先行研究（西村，2005）と、アイロニーの聞き手を“あなた”とした本研究での差異かもしれない。本研究では聞き手を“あなた”としたため、アイロニーが対象者自身に向けられて犠牲者となる状況が高まったと考えられる。聞き手の予測の失敗という文脈情報（明示的先行発話）に比べて、現在の否定的状況が聞き手に統制可能であったという文脈情報（統制可能性）の方が、より強い聞き手の“責任”が知覚される文脈情報であるという、文脈情報の2要因の特徴がより明確になったといえる。また、アイロニー発話において第3者の立場をとるか聞き手の立場をとるかという違いによって、異なった文脈情報に注目しやすい可能性を本研究は示唆しており、アイロニーの評定者の立場について今後の検討が必要であろう。

さらに、曖昧性耐性がアイロニー理解に及ぼす影響については、曖昧性耐性の“不安”と“拒否”の側面によって、アイロニー理解の特徴は異なった。

“曖昧な状況での不安”では、軽蔑性という強い否定的態度評定において統制可能性との交互作用がみられた。この結果は、曖昧な状況で不安になりやすい人たちは、アイロニーの聞き手である自分自身が否定的現状の統制に失敗した状況において、アイロニー発話に対して軽蔑という否定的態度を感じやすいが、曖昧な状況でも不安になりにくい人たちは、否定的現状の統制に失敗しても軽蔑的な態度を感じにくいことを示している。“不安”の耐性が低いと、統制可能性というより強く責任に関与する文脈情報に敏感になり、否定的態度を感じやすいという予測を支持した。

増田（1998）は、曖昧性低耐性の方が、生活事件の体験をより驚異的なものとして捉えてネガティブに評価することを示しており、曖昧性耐性の低さは心理的ストレスにおける脆弱性を示す概念の一つであると示唆している。アイロニー理解においても、曖昧さへの“不安”という耐性の低さを通して、統制可能性という自分自身の責任に関与する文脈情報をネガティブに評価し、焦点づけて利用することによって、相手の曖昧な発話の中に強い否定的態度を感じやすいと考えられる。一方“不安”の耐性が高い人は、統制可能性という文脈情報を利用しにくい分、強い否定的態度を感じにくいのではないかと考えられる。

しかし、“曖昧な状況での不安”と明示的先行発話との交互作用はみられず、予測の失敗への責任については“不安”によって特に偏った利用の仕方はなされなかった。曖昧さへの“不安”という耐性の低さをもつ人は、曖昧さに脅威を感じて不安を強める傾向をもつ。しかし、アイロニーの曖昧な文脈情報について、何に関しても否定的な態度を感じやすいのではなく、自分が統制に失敗したという責任の文脈を過度に重視することで、強い否定的態度を感じやすいバランスの悪さをもつ可能性が考えられる。“曖昧な状況での不安”は強迫的信念の中の責任の過大評価（Salkovskis, 1985）にも通じ、責任にまつわる推論が活性化されて、アイロニー理解のバランスが偏ることを示しているかもしれない。

一方“曖昧さの拒否”は文脈情報要因との交互作用はみられず、有意味度と嫌味性の主効果のみが有意傾向ではあるがみられた。この結果は、“拒否”の耐性が低い人は、アイロニー自体を理解しにくくなるという予測を支持している。

話し手の発話が文脈情報を利用していると聞き手が気づいた場合はアイロニーとして意味の通る発話と判断されるが、文脈情報に気づかずに文字通りの発話として捉えれば意味の通らない発話とみなされ则认为と考えられる。つまり、曖昧さの“拒否”という耐性の低さをもつ人は、文脈情報の有無に関わらず発話を意味が通らないと判断する傾向を示しており、文脈情報という理解の手がかりに気づいて利用することへの動機づけが低いことが考えられる。その結果、話し手によって文脈情報が利用されていること自体に気づきにくく、文脈情報そのものの利用をしにくいことが考えられる。そのためアイロニー発話を理解することを拒否してしまうのではないかと推測できる。実際に“曖昧さの拒否”において耐性の低い人は文字通りに理解する文脈生成を行いやすく（西村・北山, 2001）、言葉の曖昧さに関わる文脈情報を利用しにくいと、額面どおり言葉を受け取ろうとするのではないかと考えられる。

5. まとめと展望

本研究は、聞き手の曖昧性耐性によって文脈情報の利用の仕方が左右されるため、提示された文脈情報の影響が一様に現れないことを、その結果として生じるアイロニー理解の個人差から示した。

アイロニーは文脈情報の利用によって理解されるが、その際に皆が同じ文脈情報を一様に利用するのではなく、聞き手によって利用しやすい文脈情報が異なるため（つまり、最適な関連性は個人によって異なるため）、アイロニー理解に個人差が生じると考えられる。このことは、個人によってそれぞれのスタイルで同じ文脈情報を処理する際の労力やそこから得られる効果が異なるため、文脈情報に異なった着目や利用をしやすいことを示しているだろう。すなわち、文脈情報の“有無”ではなく“利用”があって初めてアイロニーとしての理解が達成されるといえ、文脈情報はそこに存在するのではなく、聞き手の選択によって決定されるという関連性理論（Sperber & Wilson, 1986）の主張を支持したといえる。

曖昧性耐性というフィルターを通すことで、気付きにくい文脈情報や敏感に反応する文脈情報が存在し、推論が左右され、その結果がアイロニー理解の差異として現れると考えられる。すなわち聞き手が話し手の利用した文脈情報に気づくことで関連性の達成に成功することが必要であり、曖昧さに対する個人のスタイルが関連性の達成のしやすさを左右する個人内要因の一つである可能性を示唆した。個人のスタイルによる関連性の達成の仕方を検討していくことは、関連性とは何かという問題提起に一つの示唆を与えることにもつながるのではないだろうか。

しかし、本論文では文脈情報の有無を条件として設定し、意味や態度の理解度から文脈情報に気づいて利用したかを判断して考察した。そのため、対象者が実際に文脈情報を利用したのかという、推論過程については直接測定できていないという限界がある。西村・北山（2001）はメタファーを補う文脈推測を文脈生成課題によって測定した結果、文脈生成がメタファー理解を促進することを示し、関連性理論の妥当性を支持している。アイロニーにおける推論についてもさらなる検討が必要である。また、曖昧性耐性は曖昧さへの態度という多次元的な視点からも捉えなおされており（西村, 2007）、

曖昧性耐性の低さという否定的側面だけではなく肯定的な側面も含めて検討していく必要もあるだろう。

注

- 1) 本論文は、九州大学大学院人間環境学府に提出した博士論文（2007）の未発表部分である研究4-3に加筆修正を行ったものである。なお、本稿に引用している著者の論文は本研究以外の博士論文の一部に該当する。
- 2) Sperber & Wilson（1986）ではエコー的解釈（echoic interpretation）に変更されたが基本的主張点は一致している。本論文では以降、西村（2005）にならい、“文脈情報”を、“アイロニー発話がエコー的に言及できる前提となる意見（期待や規範、発話）”の意味で使用する。さらに“エコー的言及”を、“文脈情報の利用”というより一般的な用語に置き換えて使用するが、アイロニー理解構造についての基本的主張点は Sperber & Wilson（1986）と異なるところはない。
- 3) 曖昧さへの寛容さなどの邦訳も用いられるが、本論文では曖昧性耐性という訳に統一して使用する。

引用文献

- Blakemore, D. (1992). *Understanding Utterances*. Oxford: Blackwell.
- （武内道子・山崎英一（訳）（1994）. 人は発話をどう理解するか ひつじ書房）
- Budner, S. (1962). Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality*, 30, 29-50.
- 春木茂宏（2003）. アイロニー：記述的研究 文学・芸術・文化：近畿大学文芸学部論集, 14, 137-160
- 今川民雄（1981）. Ambiguity Tolerance Scale の構成（1）一項目分析と信頼性について— 北海道教育大学紀要第一部 C 教育科学編, 32, 79-93.
- Jorgensen, J. (1996). The functions of sarcastic irony in speech. *Journal of Pragmatics*, 26, 613-634.
- Jorgensen, J., Miller, G., & Sperber, D. (1984). Test of the mention theory of irony. *Journal of experimental psychology: General*, 113, 112-120.
- 木村大生（2001）. アイロニーの効果緩和機能 京都大学大学院教育学研究科紀要, 47, 274-284.
- Kreuz, R., & Glucksberg, S. (1989). How to be sarcastic: The echoic reminder theory of verbal irony. *Journal of experimental psychology: General*, 118, 374-386.
- 増田真也（1998）. 曖昧さに対する耐性が心理的ストレスの評価過程に及ぼす影響 茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学・芸術）, 47, 151-163.
- 西村佐彩子（2005）. 文脈情報の利用とその種類がアイロニー理解に及ぼす影響 九州大学心理学研究, 6, 69-76.
- 西村佐彩子（2007）. 曖昧さへの態度の多次元構造の検討—曖昧性耐性との比較を通して— パーソナリティ研究, 15, 183-194.
- 西村佐彩子・北山修（2001）. メタファー理解における文脈生成とあいまい性耐性の影響についての

- 研究 九州大学心理学研究, 2, 107-116.
- 西谷健次 (1993). アイロニーの状況特性と含意 計量国語学, 19, 117-132.
- 西谷健次 (1996). アイロニーの理解における言及の影響—言及理論の妥当性の検討— 心理学研究, 66, 393-400.
- Salkovskis, P.M. (1985). Obsessional-compulsive problems: *A cognitive-behavioural analysis*. *Behaviour Research and Therapy*, 23, 571-583.
- Sperber, D. (1984). Verbal irony: Pretence or echoic mention? *Journal of Experimental Psychology: General*, 113, 130-136.
- Sperber, D., & Wilson, D. (1981). *Irony and the use-mention distinction*. In P.Cole (Ed.), *Radical Pragmatics*. New York: Academic Press, 296-318.
- Sperber, D., & Wilson, D. (1986). *Relevance: Communication and cognition*. Oxford: Basil Blackwell.
- (内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子 (訳) (1993). 関連性理論—伝達と認知 研究社)
- 種田真砂雄 (1988). 認知精神医学序説 金剛出版
- 友野隆成・橋本宰 (2005). 改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み パーソナリティ研究, 13, 220-230.

